

# じやりみち

……被災地支援情報……

第76号 発行日 2003.10.31  
被災地NGO協働センター

〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10  
tel : 078-574-0701 fax : 078-574-0702  
URL <http://www.pure.ne.jp/~ngo/>  
e-mail [ngo@pure.ne.jp](mailto:ngo@pure.ne.jp)  
口座番号 : 01180-6-68556 (郵便振替)

## 市民セミナー 寺子屋

子どもとくらしと地域の話

## フリースクールの活動から

中林和子さん (フリースクールForLife)

「寺子屋」も始めて3年になります。神戸を拠点に長くNGO活動を続けてこられた草地賢一さんが亡くなられたことがきっかけとなり、草地さんが大事にしていた「草の根」の\_\_\_\_\_として継続してきました。

2003年度は「地域とくらしと子どもの話」というテーマで講座を開講しています。まもなく震災から10年を迎えようとしているこの被災地で、もう一度「震災」とは何だったのか?、子どもの視点から、「くらし」と「地域」を捉え、本当に「安心で安全な社会」とは何なのか、を考えられる場を作っていきたいと思います。

第1回目は、フリースクールForLife代表の中林和子さんにお話して頂きました。フリースクールに通う子どもたち。その子どもたちが日々感じていることは何か。そして、その子どもたちとの関係の中から見えてきた「くらし」「地域」とは……

### ■はじめに

ただいまご紹介に預かりました中林と申します。私の活動をしている中での体験や、見えてきたものをお話させて頂き、今日のテーマである「地域がどう子どもを受け入れていくか、関わっていくか」につなげていきたいと考えています。

私は垂水区の仲田という場所でNPOの活動としてフリースクールをしています。そのほかにLD、学習障害の子どもと軽度発達障害の活動のスペースも合わせて行っています。その関わりは、大人が、子ども自身が向き合うテーマとして、非常に関心の高いものであるんですが、一緒に考えて行けたらと日常を送っています。

### ■広域通信制高校にて

活動の源になったのは、フリースクールの前に、広域通信制の高校に勤めたことです。15歳の春に切り捨てられた少年達の善と可能性を信じるというスローガンを掲げている学校で、その記事に出会って門を叩きました。

中学時代に不登校、障害を持った子ども、暴走族とかヤンチャタイプ。今までと違う子ども達に出会い、すごいカルチャーショックを受けました。ありとあらゆる多様性、境遇の中で大人達のテーマを背負わされた子ども達でした。

そこで「教師がなんぼのもんじゃ」とにじり寄ってこられたのです。初めて教壇に立ったので心躍らされていたのですが、「う～ん、ほんまやな」と受け入れられる私がいきました。お高く止まっていたのか、それまで教師との間に色々なこと、随分追い込まれてきたことを感じさせられる一言でした。

「大人がなんぼのもんじゃい」自分を問う言葉として、今でもすごく鮮明によみがえります。

人として扱われてこなかった子ども達との3年間、賽の河原に石を積むような3年間でした。でも卒業間際には、突っ張っていたものがほぐれてくる。信じる、と言うことを取り戻していきます。

そこが震災の年に閉校に追い込まれました。震災の時にも遠路はるばる学校に駆けつけてきて、大丈夫か、オレが手伝うからとやってきました。血みどろの生活指導みたいのをし



ForLifeの活動風景。みんなでグラタンをつくっているところ

てきたけど、子ども達は一生懸命子どもを信じようとする大人に対しては信じることで返してくる。そういうまなざしに対しては優しさで返してくる。

善と可能性を信じる、その部分を私はハッと気づかされました。

そういうような経験を経て、民間の一フリースクールに移りますが、子どもを信じるという気持ちを忘れずにそこに飛び込んだつもりです。

### ■不登校とフリースクール

通信制高校での不登校は、おとなしいタイプの子が多かったので、深い関わりがありませんでした。イメージ的に、暗い、落ち込んでいて立ち上がれない子ども達が集まっているのかと思っていたら、一人一人が自分をしっかり持っている、自信を持っている。そこがまたカルチャーショック。これはなんだろうと思いつつ関わり始めました。

フリースクールがどういう役回りなのか。定義は、学校に行く行かないは関係なく、学校以外の場で育つのは当然有り、子ども達が学んだり育ち合う場です。いろんな事を語り合える友だち、成長をサポートするスタッフがいて、何らかの教

育的活動が行われているところです。暗いものでも不登校に限られるものでもありません。活動は子ども達が自分たちで決め、選択します。居場所の管理も自主的にする、個性を尊重する、それが原点です。

日本にどうして根付いたのか、社会的関心を持たれたのかを考えると、何かがとても急ぎ始めた高度成長時代の社会変化。高学歴、受験戦争、偏差値教育。ひずみが一番子ども達の中に影響を及ぼしました。早い、分からない授業に取り残され、それを埋めようとして、塾通い。加古川から神戸に移って、驚いたのは子どもが誰もいないんです。9割方塾に行っている。日常たまるストレスや、大人に対する不信感。積もりに積もって向かって行くところが、自分より弱い者に対するいじめや、校内で暴れること。身の置き所がなく、非行を含めて流れていく子どもが多くなっていくんです。

体罰もそのころはありました。子どもが納得できるものでもないもの、やみくもに暴力を先生から受ける。

もっと子ども達のがのびのび出来る場所を求める動きが出来、親の会が出来、欧米のフリースクールを取り入れた居場所をつくってきたのが経緯です。社会背景と不登校を重ねて考えられます。

## ■ForLifeの活動紹介

フォーライフは追い込まれた子ども達の居場所として、1997年11月に自宅開放型のフリースクールとしてスタートしました。学校に行けるようになるための適応指導教室ではなく、自分らしさを取り戻し、心も体も楽になれる居場所を柱に始めました。

始めた当初の子ども達は、二次的不登校。不登校＝病気、と言われてきましたが、不登校となったことで起こる現象に追い込まれて出てきたことです。学校に行けないことでの、学校、親、社会の偏見からのストレス。病院の先生から紹介されたり、見学してリハビリの場としてフリースクールを捉えている向きがありました。

十分に気持ちが安定しているときはいいのですが、場合によってはマイナスになることもあります。友だちに合わせようとするとする、合わせるために無理をする子がいる。友達に会うのが楽しい、でも無理がかかる。必ずしもいい影響で終わっていない、そういうしんどい思いだったものが、だんだん相談の中身も変わってきます。

学校の問題以外に、友だちから浮いてしまう、ということでも学校に行けない。友人関係でもあり、本人の中のテーマかも知れない。中にはなんにもない、分からないというのもあります。

親は理由を知りたいがります。理由を取り除けば解決できるのではと考えるのです。が、実は親の期待に添わなければいけない、周りの先生の期待に応えなければならない、本当の自分でいられない、何かを演じていないと認めてもらえない、と言うのが見え隠れします。

### 【Prifile】中林和子さん((特非)フリースクールForLife代表)

子育て中から点訳ボランティア、地域の子供文庫や親子劇場に参加。その後、児童館などの指導者を経て、1991年広域通信制高校の講師に就任。多くの不登校を経験した子どもたちやLD的傾向を持つ子どもたちと出会い教育の原点を求め始める。1995年の阪神大震災により閉校のため退職。

その後民間フリースクールのスタッフや「明石LDを考える会」設立に係わる。1997年10月、市民・保護者の協力の下で学校に行かない(行けない)子供たちの居場所を新たに設立。翌年4月自宅を開放して「フリースクールForLife」を開校。

同時に「こうべLDの会」を併設し、LD及びその周辺児を中心にした居場所「土曜クラブ」を主宰。2002年4月NPO法人を取得し、垂水中心街近くに活動の拠点を移し、地域に根ざした子育ての活動を目指す。日本LD学会員。

稲刈り体験の様子



この記事の写真はいずれもForLife提供  
みんなで料理

自分の経験ですが、高校の頃は浮き沈みが激しかった。学校を休むという選択肢もない時代で、イヤでイヤで行けば保健室。朝は体に変調が来る。母が教師で学校的な家だったのですが、病気なら休ませてもらえました。体温計を握りしめて熱を上げて休む。でも罪悪感がある。でもなんでか分からない。子ども達と接するようになって、ずっと蓋をしていたことがもたげてきました。「いい子でなければいけなかった」自分に気づいたんです。

「いい子じゃなくていい。しんどいよね」当初寄り添うことしかできなかった。時代も変わるときかけになるものが複雑になります。

家庭のいろんな大人の問題が、子ども達に深い影を落としている場合もあります。子どもが向き合うには辛すぎる。でもいろんな状況の中でやがては受け入れなければなりません。だから私たちはあくまでも心が癒せる居場所にこだわろう、と考えています。

安心できる場所でなければならない。フリースクールは、禁止、命令、比較、評価、そういうものがない。でも何でもありか、と言うとそうでもない。子ども達自身が考え、決めていく中で、責任も生まれる。納得のいく、一方的なものではないのが安心できる要素です。

## ■出会いと体験を通して

出会いと体験、特に自然体験を柱にしています。子ども達がミーティングで決めて行事にしています。

出会いというのは雲の上の人でなく、身近な、人間味のある行き方をしている人との出会いです。先日は村井さんに来てもらってアフガニスタンの話を聞きました。子どもは非常に感銘を受けました。海外での活動体験を聞くのは初めての経験で、生で子どものことを聞いたのがとても大きくて、子どもたち皆で話して葡萄畑の支援をしようかと言っています。

演劇をしている人やアーティスト、自然、冒険的なことをしている人との出会い。こんな人になりたい、こんな生き方をしたい、というモデルになり、何か呼び覚ますものになります。それが未来に向かって生きていく子どもにとっても大事です。

トト口の森  
かくれ家大作戦！



淡路島（津名町）の大自然の中で木造の温室を改築した家作りを体験。大工さんの技を真似ながら、一から手作業で取り組んだこの家作り。出来上がったときの達成感と感動はひとしおだったとのこと。左写真は完成した家でのバーベキュー。

一番大きな活動が、ビデオで15分くらい見て頂く野外活動です。自分たちの基地が欲しい。釣り、海、山……テレビにヒントを得たのか、廃屋を使って基地を作ろうという提案が出てきて、男の子達が乗ってきました。家探しに半年、新聞にも出て自分たちも探すのですが、なかなか無い。やがて、学校の先生で農家を兼ねた人がいて、温室を提供しようという話になりました。そのときの記録ビデオです。

＜トト口の森のかくれ家（上写真）のビデオ上映＞

約8ヶ月の作業を通じて子ども達は大きな事を学びました。日頃の活動を通して言えることは、連帯感、達成感と、次につながる意欲みたいなものが生まれること。弱い子ども達が、だんだん自信を持っていくという姿に、とても心を打たれ、目を見張るものがあります。

大きいのは地域の方々の存在です。私たちがNPOになったのは、一個人の領域ではなく、みんながつながりあう中で、子育て、自分育ても含めて、育ち合おうということを考えたからです。相談の内容も単なる不登校だけでなく、多岐に渡ります。虐待の問題もあり、一人では抱えきれない問題もあり、ネットワークの中で、私はここが出来る、他はここで助けてもらおう、そういうつながりの中で育ち合おうということを目指しました。

学校に行けば、親が悪い、家庭が悪い、と済まされます。子どもの問題は大人の問題、社会全体で考えなければならないんです。学校に行かないことで差別偏見がおき、トイレの水も流せなくなり、雨戸を閉めて家の中にもっている。人が人として生きていけない社会とは何だろう。ポストの数ほどフリースクールがあったらいいよね、とっています。地

域の中で暖かいまなざしを、ポストの数ほど暖かいまなざしが、学校以外に、先生以外に、親以外に、そういう人たちが存在することが、思春期の一杯大きな問題を抱える子ども達に大きな意味合いがあります。

■地域は子ども達をどう受け入れるか

不登校の子どもは、奇声を発するんじゃない、暴力をするのでは等と誤解され、最初に場所を探したときは、須磨の事件があった直後で、非常にそういう目がきつかった。子ども達はそういう雰囲気のある所には、空気を感じて通えない。なんとか差別偏見をなくそう、打破しないと子ども達はいつになっても楽になれない。

自宅で行ろう、ということになりました。でも自宅は閑静な住宅地で、近所の目がすごい。「これ以上人を集める気?」「いつまでやる気?」

餅つきをしたら餅を配る、何かをしたら挨拶、いつも近所のコミュニケーションをしてきました。5年間続けているうち、町内会長さんが次第に理解を示してくれました。何かあると非常に敏感に反応する地域で、LDや不登校のこと、会長さんにしか話してないのですが、町内会の理事会への説得も会長さん自身がしてくれるようになりました。最終的には集会所を使うときは回覧板を回してくれたり、少しづつ理解を下さろうとしているんだなと実感しました。

家を探して仲田町に移るときも、袋小路の角で周りの家が隣接する場所でした。「何かあったら大家さんに言います」。親の会が挨拶に行き、私が行き、周旋屋さんにも挨拶に行き……そうこうしているうちに、不登校のイメージを持っていた人たちが、ふっと「ごめんね、ここの子ども達はとっても笑顔が素敵だよ」と。私たちが多くの言葉をしゃべるより、子ども達の姿の方が皆さんの理解を得た。

私たち自身にも問題がなかったかと考えました。子ども達のニーズがあり、私たちも頑張らねば、と過保護になっていたのかもしれませんが。結局子ども達がしてくれていた。私が5分遅れたときに、斜め前のおばあちゃんの家で待たせてもらった子どもがいました。たこ焼きパーティーをしたとき、お向かいのおじいさんを呼びにいった、とても喜ばれた。「あんなたちの顔をみると元気になる」と全面的に受け入れてくれました。ハーモニカのボランティアをしている方で、にわか演奏会になり、とても和やかなひとときでした。

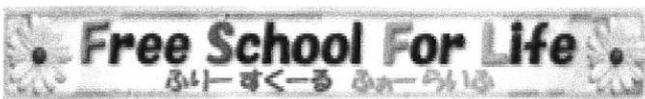
ご近所や地域との関わり、フリーマーケットや地域とのイベントの請負、社協が前向きに引っ張る……いろんな人の関わりがあってやっています。

温かく見てくれる大人がいる。それをしっかり感じて答えようとする。優しさで頂いたものは、優しさで返す。信頼されたものは信頼で返す。そういう子ども達の素敵な姿に触れる機会を頂いた私はとても幸せです。

子ども達と一緒に共感しあえる大人でありたい。

地域が差別偏見を持たないのはもちろん、いつも一緒に考える、寄り添う気持ちがあれば、子ども達は伸びやかな毎日ではないかと思っています。

フリースクールForLifeの連絡先



神戸市垂水区仲田2-1-32 TEL/FAX078-706-6186  
forlife@hi-net.zaq.ne.jp  
http://www5e.biglobe.ne.jp/~forlife/

新シリーズの寺子屋第一回、いかがでしたでしょうか。中林さんの話の後は食事を囲みながら活発な質疑応答となりました。全編収録の講義録も製作しておりますので（実はここに載せてあるのは要約です）、ご希望の方は被災地NGO協働センター事務局までお気軽にお問い合わせください。実費でお送り致します。なお、次回以降の寺子屋の予定を7ページに載せてあります。みなさまの参加をお待ちしております!!

被災地の現場から

# ぶどうプロジェクト

(アフガニスタン・シャモリ平原)

CODE 海外災害援助市民センター 斉藤容子



「アフガニスタンぶどうプロジェクト」がスタートして、6ヶ月が経ちました。皆様からご協力頂いた「ぶどう基金（＝ぶどうオーナー賛助金）」によって、とりあえず300家族のぶどう農家をご支援してまいりました。本当にありがとうございます。

2001年「9.11」以降、アフガニスタンからイラクへとまるで憎悪の連鎖のように戦争が始まっていきました。私たちは暴力の連鎖よりも支援の連鎖をと声をあげてきました。アフガニスタン攻撃から早くも2年が過ぎ去ろうとしています。イラク攻撃も終結宣言という“宣言”はだされました。

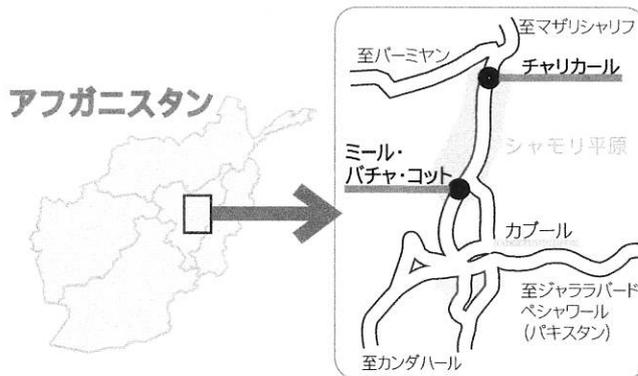
その結果、私たちは何を得たのでしょうか。戦禍の中にはそこで暮らしていた人々の生活があります。そんな中紛争によって被害を受けたぶどう畑が、再び芽を出そうとしています。アフガニスタンにもう一度緑を、心に花を。

## ■ぶどうプロジェクトとは

ぶどうプロジェクトは20年以上に渡る内紛、そして米英軍などによる攻撃を経験したアフガニスタンで何か支援ができないかと現地調査に入っていたスタッフが、たまたま首都カブールから北西部のシャモリ平原を通った時、真っ黒に焼けこげたぶどう畑を見たことがきっかけでした。

シャモリ平原は、過去の紛争において最後の激戦地と呼ばれ、ひどい被害を受けてきたところです。元々ぶどう栽培が盛んであったこの地では、ぶどうは人々の生活の糧でした。ところがタリバンは彼らの家を焼き討ちにし、そしてぶどうの木までもを焼き払ってしまったのです。

家を失い、ぶどうを失った人々は、カブールへ、北部へと方々に避難せざるを得ませんでした。しかしタリバン政権崩壊後、人々は少しずつ元の土地へと帰ってきました。そこで彼らの生活の糧となるぶどう畑をもう一度よみがえらせることで、アフガニスタン再建の一助に願いから立ち上げられたものが「ぶどうプロジェクト」です。



## ■現地の人々が中心に

ぶどうプロジェクトは現地の人々の生活の再建を目的としています。それには現地の人々が中心とならねばなりません。アフガニスタンの伝統的な社会で活動をしていくために、私たちはまず「シューラ」と呼ばれる村の評議会の人々との協議から行いました。そして村を代表して2名を選出し、ぶどうプロジェクトのための代表者委員会が作られました。そして未亡人家族、障害者家族、最貧困家族を含めた最も支援を必要とする家族の選出が、彼らによって行われました。

対象となる300家族ですが、必要な支援内容は様々です。例えば、戦争未亡人や障害者が世帯主の家族の場合、ぶどう畑を耕すにも働き手がいません。こういう場合は労働力を雇用する資金が必要となります。またある家庭では新しい苗を買わなければならない人もいます。このような様々な支援が必要となるため、私たちは「ぶどう基金」を設立し、シューラを中心に運営をしていきます。

## ■初年度は資金の融資を

6月には、現地でいよいよ300家族に対しての貸し付けが始まりました。1年目はこの300家族にお金を融資し、それを元手として、各家族が必要とする水や肥料、苗や労働費用など、ぶどうのための資金として使うことが決められました。プロジェクトは協同組合方式で進められ、融資したお金は原則として1年後に5%の利子を付けて基金へ返すことも決められました。戻ってくる利子分のお金は2004年度に支援対象世帯を拡大したり、地域で共同利用できる施設を作る資金などに充てられる予定です。

## ■収穫の秋・再建への道

私たちの帰国後、各家族はそれぞれに貸し付け金を使いながら、ぶどうの世話をはじめました。中には、周りの畑の人たちと少しづつお金を出し合い井戸を掘る機械を使い、水がでるようになったという報告も聞かれました。

そして今秋、いよいよぶどうの収穫が始まりました。今回収穫時期を迎えようとしているのは、紛争後各地より帰還した人々が真っ黒に焼けこげたぶどうの根を掘り起こし、新たな芽がでるようにと育てたものです。それらの木からは約5kg



～7kgのぶどうが採れるそうです。そして人々はそれらをバザールへ持ち込み、食用として売りに出しています。現地の価格ではぶどう7kgが1.5ドルから2ドルで売られています。特にタリバン政権崩壊後、近隣諸国へ避難していた人々が帰還し、農業を再開させたこともあって、相場は低くなっているようです。

半年間の支援を通じて感じたこととして、水の問題があります。4年に渡って続いた早魃の影響が深刻でぶどう畑の再生に必要な水が枯渇しています。この段落の冒頭で述べましたように、新たに共同で井戸を掘った人たちもいますが、今後も継続して水の問題を真剣に考えていかねばならないでしょう。

私たちの滞在中、未亡人の方とお話をする機会がありました。「夢はなんですか」と尋ねたら、「以前のように普通のくら

しをすることです」と言われました。戦争とはそこに暮らしていた人々の普通の暮らしを壊してしまうことなんだと改めて気づかされます。どうすれば彼女の「普通の暮らし」を取り戻すことができるのか、自立への道が開かれるのか、「普通の暮らし」を当たり前のように暮らしている私たちも彼女たちと一緒に考えていかなければいけない問題をもっているのではないのでしょうか。

人々の本当の再建はこれからかもしれません。一本のぶどうの木から、地域の再興と暮らしの再建を目指し、夢は大きく広がります。

【参加方法】

■ぶどうオーナーになって下さいませんか？

ぶどうプロジェクトは、アフガニスタンの人々の自立、自律をサポートする事業であり、援助のための事業ではありません。だから私たちとの「協働事業」です。遠く離れた、大切な人の成長を楽しみにするように、アフガニスタンのぶどうを見守って下されば光栄です。

ぶどうオーナーになって頂くには、一口3,000円（年間）又は「ぶどうオーナー・3年会員」3年分9,000円をご支援頂きます。会員の皆様には会員証と年数回「ぶどう新聞」を発行いたします。また皆様のお名前が入った名札をアフガニスタンのぶどう農家へお届けします。

お申し込みは、お電話又は同封致しましたぶどうちらし裏面にあります申込み用紙に必要事項をご記入の上FAXしてください。

(TEL 078-578-7744 / FAX 078-576-3693)

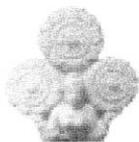
振り込み用紙、会員証を送付させていただきます。

# 在り日の カーブル博物館

Traces: The Kabul Museum 1988 1988年



93年に破壊されたカーブル博物館。カメラは88年当時の無傷の博物館の代表的文化財を撮影していた。ギリシャ・ローマなど紀元前のヘレニズム文明の遺産、その神話の神々への憧憬と刺激から生まれたといわれる仏教彫刻・・・ガンダーラ、パーミアン、ショットラック美術など。92年のアフガニスタン民主共和国の崩壊以後、その7割が破壊され、略奪され、日本をはじめ海外に流出した。カーブル博物館の文化財のフィルムは他にはない。



## アフガニスタンの歴史と未来をつなぐために



土本典昭 私家版 シネ・アソシエーション 作品ビデオ

アフガニスタンの東西文明の十字路としての歴史は、20世紀に発掘されたシルクロードからの出土品で一躍、世界の耳目を惹きつけた。紀元前のギリシャ・ローマの地中海文明が若いアレキサンダー大王によって、中央アジアにもたらされていたことは、フランスをはじめ西欧の考古学者たちを発掘に駆り立て、また、正倉院の宝物や仏像の淵源が中国、西域ををるかに溯ってアフガニスタンの地であったとして、日本の考古学者を奮い立たせ、アフガニスタンは20世紀の世界史研究の最も新しい対象の地に目された。

不思議とも言えるが、かつて栄えたエジプトのガラス工芸もインドの象牙彫刻も戦乱や多湿な風土で腐食させたか、原産地では発見されていない。アフガニスタンの乾燥地と土レンガの建築素材が幸いしたといわれる。それらはカーブル博物館にのみあるのだ。

なぜ、アフガニスタンの歴史的遺産が破壊されたのか。アフガニスタンの歴史教科書にはマホメッド（7世紀）以前は記述されていない。つまり、異教徒時代の歴史は教わっていないという。タリバンによるパーミアンの大仏の爆破は偶像破壊の象徴的な出来事である。

彼等は「世界は大仏の破壊には騒ぐが、アフガンの民衆の飢えには無関心だ」という。ゆたかな歴史の遺産に誇りを持つ教育がなかったのだ。西欧・日本の発掘も近々この数十年のこと、カーブル博物館などの価値はアフガン民衆にはまだなじみがなかったと言えるのだ。

アフガニスタンの歴史は『在りし日のカーブル博物館』の学習から始まるかも知れない。カーブル博物館の代表作の写真は残されているが、映画としてはこれが最初にして最後になった。

(これは「よみがえれカレース」の未使用ネガから作成した。この作品は未使用ネガから復元し、将来のアフガニスタンの資料映像となるようにビデオ化したものである)

< 頒価 >  
個人・NPO・・・ 5,000円  
教育機関・  
図書館など・・・15,000円  
(ともに送料別)

CODE

海外災害援助市民センター  
神戸市兵庫区中道通2-1-10  
TEL078-578-7744  
FAX078-576-3693  
e-mail : info@code-jp.org

土本監督のご協力により  
販売益の一部が活動資金に  
寄付されます。



# 転機の被災者生活再建支援法

「5年をめどに」見直す2003年がやってきた

震災がつなぐ全国ネットワーク事務局 福田和昭

「被災者生活再建支援法」という法律があります。阪神・淡路大震災をきっかけに、1998年に成立した法律です。法律の話ですが、肩肘張らずにお付き合いください。

## ■なんでできた法律なのか？

阪神・淡路大震災が発生したとき、被災者個人に対して、政府が直接、お金の支援をすることはできませんでした。「個人財産に公的資金の支給はできない」というのが、当時の政府・大蔵省の考えです。被災者へのお金の支援は義援金が頼りでしたが、震災では過去最高の義援金が集まった反面、被災者の数も桁違いに多かったため、全壊世帯への支給額は約50万円にとどまりました。雲仙普賢岳噴火(1990)や北海道南西沖地震(1993)では、全壊世帯に1,000万円を超える支給があった一方、逆に広く知られていない災害では義援金の募集が行われないこともあります。

自然災害の被災者に、きちんと生活を再建できるための支援の枠組みが必要だ、という声が、被災地から上がりました。1996年に市民団体の「市民＝議員立法実現推進本部」が法案を提案。当時の政府・自民党は抵抗しましたが、自治体が独自の支援案を提案したり、コープこうべなど日本生協連・連合・全労済などが全国から2,500万人もの署名を集めたりするなどの運動もあり、1998年に「被災者生活再建支援法」が成立しました。

当初の案よりも支給対象や支給額が制限されたものでしたが、個人のくらしの再建に踏み込んだ点では小さいながらも大切な一歩を踏み出したといえます。

## ■どんな法律か？

簡単に言ってしまうと、自然災害の被災世帯に最高100万円までの支援金を支給するものです。支給対象は、全壊かやむなく解体を余儀なくされた半壊世帯で、下表のような年齢・所得制限が付いています。支援金の使用目的にも制限があり、家具・家電の購入修理費や引越費用、ベビーベッドや補聴器など個別事情で生活に必要な物品などに限られています(住宅再建の費用は対象外です)。

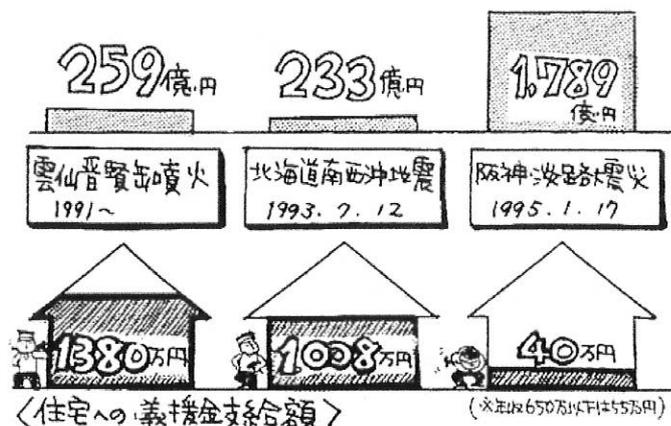
## ■これまでの支給実績

内閣府のまとめでは、法律が施行されて以来の既支給世帯数は2,563世帯、支給総額は20億2,305万円となっています(2003年9月30日現在)。今年に入ってからの災害では、7月の九州の集中豪雨と、宮城県北部連続地震が対象となりました。また噴火の続く三宅島も引き続き対象地域となっています。

阪神・淡路大震災には遡及適用されませんでした。行政措置として「被災者自立支援金制度」ができ、被災者生活再建支援法に準じたお金の支給が行われました。しかし震災から間が空きすぎたことや、既存の支援策を受けていた場合は減額されたこともあったことから、支援金が役に立ったという実感が薄れてしまったことは否めません。

## ◆災害ごとの義援金支給額

〈集まった義援金の総額〉



全壊世帯の場合の最大支給額の比較。様々な支給の組み合わせの最大額なので、全ての被災者がこの額を支給されているわけではない。(1996年7月13日神戸新聞記事より作成)

※『お金がいるぞう!考えたぞう!』より引用。イラスト：山田光

## ◆被災者生活再建支援法の支援枠

世帯の収入合計額	世帯主の年齢など	支給限度額	
		複数世帯	単数世帯
500万円以下	世帯主の年齢は問わない	100万円	70万円
500万円超 700万円以下	被災日において世帯主が45歳以上の世帯 または要援護世帯	50万円	37.5万円
700万円超 800万円以下	被災日において世帯主が60歳以上の世帯 または要援護世帯	50万円	37.5万円

## ■法律の課題

内閣府の資料では、法律の対象となった自治体の全半壊世帯は11,000を超えているそうです。一方、支援金支給世帯は2,563ですから、実に75%もの被災者が制度の対象外となっています。また支援金は使途が細かく制限され、住宅再建には使えません(もともと最高100万円の支給額では家が再建できるものではないのです)。

このため鳥取県西部地震(2000年)の被害を受けた鳥取県では、独自に住宅再建支援に乗りだし、所得制限なしで最高300万円を一律に支給しました。また今年7月の宮城県北部連続地震でも、宮城県が独自に最高100万円を所得制限なしで支給しています。

災害の現場に近い地方自治体の方が、地域ごとの事情があるとはいえ、より深刻に住宅再建支援の必要性を感じている現れともいえます。

## ■法の見直しに向けて

このような現行法の課題は、法律制定時点である程度予測されていました。

## ◆被災者生活再建支援法の適用された災害

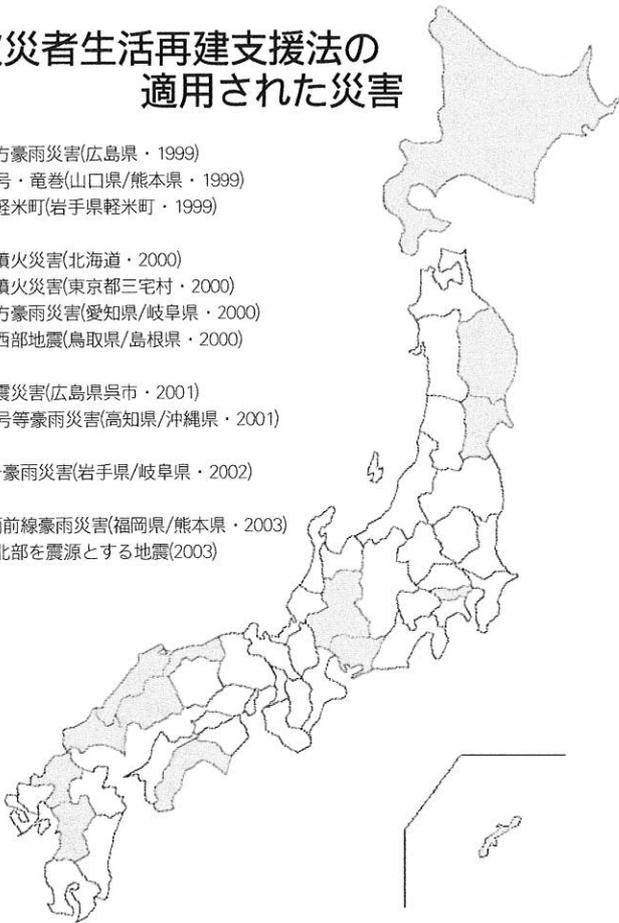
中国地方豪雨災害(広島県・1999)  
台風18号・竜巻(山口県/熊本県・1999)  
岩手県軽米町(岩手県軽米町・1999)

有珠山噴火災害(北海道・2000)  
三宅島噴火災害(東京都三宅村・2000)  
東海地方豪雨災害(愛知県/岐阜県・2000)  
鳥取県西部地震(鳥取県/島根県・2000)

芸予地震災害(広島県呉市・2001)  
台風16号等豪雨災害(高知県/沖縄県・2001)

台風6号豪雨災害(岩手県/岐阜県・2002)

7月梅雨前線豪雨災害(福岡県/熊本県・2003)  
宮城県北部を震源とする地震(2003)



※灰色は支援法が適用されたことのある都道府県  
この他にも法に漏れた災害に対して独自に支援を行ったところもある。

そのため、法律の付則第二条に「自然災害により住宅が全半壊した世帯に対する住宅再建支援の在り方については、総合的な見地から検討を行うものとし、そのために必要な措置が講ぜられるものとする」ことが盛り込まれています。平たくいえば、住宅再建の措置も検討しようということです。また国会を通過したときに、施行後5年をめどに見直し、という付帯決議がなされています。施行が1998年ですから、今年2003年が、その見直しの年にあたります。

法律の改正のポイントは2つです。

1つは現行の支援法の改正で、細かく定められている収入・年齢要件を緩和し、支援対象を拡大することが主眼です。もう1つは住宅再建支援に対する新たな現金支給です。

現在、全国知事会と、超党派の「自然災害から国民を守る国会議員の会」、内閣府の3者が改正へ向けての案を出しており、調整が行われています。

11月9日投票の総選挙の後の国会で、この改正案が議論の俎上にのぼることになります。

財政危機のあり、新たな支出を伴う自然災害被災者への公的支援に対して慎重な向きもあります。一方で、実際の被災地では、災害に携わった当事者だからこそ、公的支援の必要性を訴えています。

みなさんの地域の立候補者が、災害後の公的支援についてのどのような考えを持っているのか、それによって法案の行方が左右されるかもしれません。法を制定するのは国会ですが、その国会議員を選ぶ機会が目の前にあります。この機会を大切に活かしたいものです。

# 子どもとくらしと地域の話

## 市民セミナー 寺子屋

今回の寺子屋のテーマは「子どもとくらしと地域の話」。まもなく被災から十年を迎えようとしているこの被災地で、もう一度、「震災」とは何だったのだろうか?ということを考えます。  
子どもの視点から「くらし」と「地域」を捉え、本当に「安心で安全な社会」と何なのかを考えられる場を作りたいと考えています。

※この講座は「生活復興県民ネット」の地域活動推進講座助成金の支援を頂いて実施しております。

### 11. 1 (土) 地域の多文化な子どもたち ～地域の教育考える～

国際交流が盛んになっている昨今であるが、地域に目を向けると、多様な文化背景を持つ子どもたちがいる。その子どもたちの今、そして子どもたちが望む社会とは?  
吉富志津代さん・ワールドキッズコミュニティ

### 11.12 (水) 平和を考える ～子どもの明日のために～

9.11以降、世界各国でも平和を求める運動が活発になっている中、難民として日本に渡ってきた人々を支援する人々もいる。実際に取り組んでいる人々の思いとは?  
藤井昌子さん・ビジュアル・コミュニケーション研究所/色彩楽園

### 11.27 (木) 障害者と共に辿りつつ生きる ～人の絆こそカ～

「共に生きるとは?」「私に求められたのは何か?」を命題に、これまでの障害を持つ人々と向き合う中で見えてきたこと、生きる力、あるいは自立とは何かを考える。  
松村敏明さん・えんびつの家

### 12.11 (木) 地域から発信する子どもたち ～太鼓を通して世界へ～

震災後、太鼓を通して子どもたちが地域・世界と繋がっていく。そのプロセスの中で、何を感じ、何を発信することを大切だと考えるのか。主体的に参画する子どもたちの今を考える。  
仲美佐栄さん・はたっこ太鼓

- ・時間はいずれも、**18:30～21:00**
- ・会費は**2,000円** (500円が資料代、ほかは軽食代)
- ・会場は被災地NGO協働センター
- ・各回とも定員**25名**。TELにてお申し込み下さい。



# ぞう通信。

1995年1月17日阪神・淡路大震災が発生し、来年でもう丸9年となり、10年目を迎えます。「まけないぞう」が、KOBE発生きがい支援事業として、1997年7月にスタートしてから、多大なるご支援を承り、心より御礼申し上げます。

被災者の方に「生きがい」や「しごと」、「コミュニティ」づくりのきっかけとなり、みなさまからたくさんの元気や勇気を頂きました。震災から避難所へ、仮設住宅、そして復興住宅へと被災者の方々の生活はこの9年の中で様変わりしました。しかしながら見た目の復興と被災者の心の復興にはまだまだ大きな差があるようです。

最近では国内で地震が多発し、海外では「戦争」や「紛争」が日常的に繰り返されています。「作り手さん」たちもこのような悲しい状態に心を痛めています。被災地KOBEから「命の大切さ」をもっと大きな声で発信していきたいと思えます。

世界へ・・・



## 被災地KOBEから 「命の大切さ」を叫ぼう

「まけないぞう」の作り手さんも、辛いことはあるけど、「まけないぞう」を作ることで、みなさんのメッセージによって、元気や勇気を頂きました。みなさんがKOBEや「まけないぞう」を思い続けてくださり、本当にありがとうございます。

今では、海外の被災地へも届けられ、言葉が通じなくてもKOBEの想いを感じてくれます。作り手さんも、「被災者のまけないぞう」が「全国のまけないぞう」になって、いま「世界のまけないぞう」になっていると、「支え合うことは本当に素晴らしいことです」とおっしゃっています。

どうぞこれからもKOBEのこと「まけないぞう」のこと、忘れないでください。



子ぞう300円



リングぞう500円



まけないぞう400円



親子ぞう700円

「一本のタオル運動」にもご協力下さい。

### 作り手からのメッセージ

作り手さんが、入院していた時のことです。お隣の部屋に入院していた人に「まけないぞう」の説明をして、「病気に負けたらあかんよ」と言ってプレゼントしたところ、その方は、とても喜んでくれたそうです。その後、「私のお友達でまだ若い娘さんが大病を患い、学生たけど学校にも行かず、その病気の手術を迫られ、娘さんは『手術してもどうせ治らへん病気だったら、好きなことして死んでやる』と、やけになり、そのお母さんはとても手をやいていて、ぜひこの「まけないぞう」をプレゼントしたい」と言ったそうです。作り手さんは「どうぞあげて下さい」と言って、そのお母さんからその娘さんに「まけないぞう」をプレゼントしたところ、「じゃあ私も手術してもがんばる」とその娘さんの気が変わり手術を受けたというエピソードがあったそうです。その話を聞いた作り手さんはとてもうれしかったと喜んでいました。

### 支援者からのメッセージ

阪神・淡路大震災の日・・・

私は生後5ヶ月の子供を抱えて、テレビに映し出される映像に釘付けでした。避難先で小さい赤ちゃんを抱いたお母さん方を見て、私も自分のことと重なってしまったのでしょうか・・・。みるみるうちに私自身のおっぱいがカチカチに張ってしまいました。急いで助産院に駆け込んで治療を受けました。助産婦さんに「きっと母性が働いたのね」と言われました。「あなたが被災した人たちを思う気持ちは立派だけど今は赤ちゃんと母体のことを考えて報道はなるべく見ないように」とも言われました。何も出来ない自分がとても歯痒かったことを覚えています。わずかながら募金だけして、私はいつもの忙しい生活に戻ってしまいました。

1月17日が近づくと思い出すものの、結局何もしていない自分に気付きます。(中略)何かのお役に立てればと思い、お問い合わせさせて頂いた次第です。

紛争によって焼き尽くされたぶどう畑がいま、  
ふたたび芽をだそうとしています。  
アフガニスタンに緑を、心に花を。



よみがえれ アフガニスタン!!

# ぶどうの木「オーナー」に なりませんか?

## くらし再建「ぶどうプロジェクト」

23年間の戦禍が終わりつつある中、期待と不安を抱きながら、故郷を離れていた人たちが少しずつ故郷へと帰ってきています。私たちは、もともと肥沃な大地でぶどう畑を営んでいた人々の生活の再建を支援しようとアフガニスタン「ぶどうプロジェクト」を2003年7月から地元の人々と共に開始しました。

国際社会から見離され続けてきたと言われるアフガニスタン、戦争によって破壊されつくされた場所には、人々の生活の再建が残されています。ひとりが一本、一家族が一家族。ぶどうの成長を一緒に夢みませんか?

詳しい資料をお送りいたします。右記の連絡先までご連絡ください。

### ぶどうオーナー

一般会員  
年会費：3,000円（一口）  
3年間会員  
初年度に9,000円（一口）

### 「ぶどう基金」へ

出資いただいたお金は300家族の自立のために使っていきます。基金の運営・管理は村の代表者らで行っていきます。

### 日本とアフガンをつなぐ

「オーナー」の方には、会員証をお送りいたします。またぶどう畑の再建の様子をお伝えできるように、通信を発行いたします。

CODE

海外災害援助市民センター

Citizens towards Overseas Disaster Emergency

<http://www.code-jp.org>

〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10  
tel : 078-578-7744 fax : 078-576-3693  
E-mail : info@code-jp.org